

玄関のチャイムを鳴らすとすぐに、「いらっしやい」という言葉と共に扉が開いた。
私にとっては、もはや慣れ親しんだ場所で、友人の家に上がりこむときの特有の高揚感というものは感じられなかった。
「ハッピーバースデー」
と、お決まりの文句が私の第一声だった。親しい仲に改めて誕生日を祝うというのはどうも小っ恥
ずかしく、
ちょっとした冗談も思わず添えてしまったのだが。
「お誕生日おめでとうございます」
一緒に来たクラスメイトもお決まりの挨拶をした。普段どおり礼儀正しく、なのに初々しく。
「おお、サンキュー」
ほら、そうしたらさっき私の冗談で怒っていた顔が、ふわりと柔らかくなって、私には滅多に見せて
くれない
可愛らしい笑顔を隣に向けてしまうのだ。
こういうことになるのは分かっているのに……私はいつも素直になれないのだ。
目の前で微笑む私の大好きな人は、しかしその笑みが私に注がれることはなく、それに嫉妬してし
まう自分が
本当に嫌になる。
「これ、つまらない物ですが」
ドロドロとした嫉妬にも気付かず、やんわりとした微笑を讃えながら、彼女は更にプレゼントの
入った紙袋を手渡した。
あまり表情は変らなかったが、しかしいつも見つめている私には分かってしまった。彼女からのプ
レゼントに
本当に喜んでいることを。
そして私はまた彼女を恨めしくまた羨ましく思ってしまう。
ドロドロ、ドロドロ、ドロドロ。どす黒く、粘性の強い溶岩が体の中を流れていくような感覚。強い、
独占欲が、
私を、支配して
「……ッ」
冷や汗がフーッと流れた。また、やってしまったと思った。
私はそんな邪まな感情を拭い去ろうと、平静を装ってプレゼントを渡した。
やはり、あまり喜んではもらえなかった。私の想い人は、センスや趣味が私とはまるで違うのだ。
いや、それはきっと言い訳。勇気のない自分への言い訳。
本当はもっと別のものを買ってきていたのに、結局渡す勇気がなかったのだ。
部屋に上がらせてもらった私達は、愛すべき人の妹がつくったクッキーを肴に話に花を咲かせてい
た。
だけど私は、クッキーを食べてばかりいた。彼女の方ばかり見て話すのにまた嫉妬していたからだ。
なのに、あの人に『他人の誕生日なのだから遠慮しろ』と言われてしまった。
ああ、まったく私の行動は裏目に出してしまう。好かれないのに、そのせいで嫌われてしまいそうなジ
レンマ。むしろ恐怖。
でも私はやっぱり意気地なしだから「美味しいからね」などとはぐらかす。
だけど私は一瞬手を止めてしまった。今回は自分も一緒にそのクッキーを作った、などといわれて
しまったのだから。
体が、顔が火照るのが分かる。頬が高潮しているのかもしれない。
それはそう、ごく自然な反応。だって、家事が得意というわけでもないのに、私のために作ってくれ
たかも
知れないクッキー。
……………
そう、作ってくれたかも知れないクッキー。本当は彼女のために作ったのかもしれない。
「どうしたの？」
またドロドロしたものがこみ上げる。私は咄嗟にごまかすことしか出来なかった。
「そう聞くと、美味しいのとそうじゃないのがある気がするから不思議だね」
だって、あなたが作ってくれたものに叶うものなどないのだから。
「なんだと！」
また怒らせてしまった。

そうやって憎まれ口を叩いてばかりでその日は終わる はずだった。

「じゃあ、私はこれで失礼しますね」

おっとりとした足取りと口調で彼女は退室した。

正直、ほっとした。最近彼女といると、嫌な感情ばかり覚えていたから。

「私も夕飯の準備してくるね」

妹もそう言って出て行った。

気まずい。お祭りが終わった時の余韻と、やるせなさが混ざったのと同じ感じがする。そして何より、2人きり。

本当はもっと一緒にいたかったけど、その空気に耐えられず、私も帰ることにした。

「じゃあ、私も帰るね」

なのに、私は腕を掴まれた。

「え？」

ドキドキした。私の腕を掴む、その手を通して、鼓動が伝わるんじゃないかと思うぐらいに。

「その……送ってくから」

「ど、どうしたの。珍しいね。というか初めてじゃない？」

多分そんなようなことを言ったと思う。口早に言った台詞は、あまり考えずに言ったので覚えていないのだ。

あっという間に家についてしまった。

始終ドキマギしっぱなしだった私にとっては数分の出来事に思えた。

ガチャッという音をたてて、カギが開いた。

「それじゃ、さよ」

うなら、と続けようと後ろを振り返り、私は瞬間固まってしまった。

「……………」

..

そこには、いつの間にか髪を下ろした愛おしい少女がいたのだから。

「あのさ、私ね、誕生日に言おうって決めてたんだ」

彼女が、言葉を紡ぐ。

「私……貴女の事が好きなの。

好きだから照れ隠しに怒って見せたし、好きだから一緒にのクラスになりたいと思ったし、好きだから

いつも一緒にお弁当を食べてたの!!」

狂おしいほど愛おしい。だけど届かないところにいたはずの彼女が、そんなことを言ったのだ。もう、この気持ちを言葉にすることなど不可能に違いない。私はこんな気持ちを表す言葉を知らない。

「私、、もお、私も、好き、大好きい」

「う、わ、ちょっと、なんで泣くのよ」

「だって、だって、だって」

嬉しさで涙が出るなんて本当にあるんだ、と思った。

「もお、仕方ないな」

そう言って彼女は私をそっと包み込んでくれた。

彼女の手が、腕が、体が、暖かい。丁度彼女の胸の辺りに私の頭が、トンと乗った。

「う……ぐしゅ」

「ほらほら、よしよし」

「うん……」

そっと、そおっと、彼女の手が私の髪を梳いていく。

まるで髪の毛の一本一本まで、彼女に染められていくようだった。

小一時間程たった頃だろうか。ポツリ、と呟いた。

「あたしもう帰らなきゃ」

「ヤダ」
「いや、ヤダって」
「ヤダもん」
もっともっと、こうしていたかった。
きっと一日中こうしても足りないと思うのに、今だけなんて、耐え切れない。
「今日家に誰もいないから、泊まって行って」
「……わかったわ。まったく、こんな甘えんぼさんだったなんて」
私はその日最高の笑みを浮かべた。

とりあえず戸棚にあった紅茶でもてなすことにした。

今こうして私の部屋に一緒にいること。それだけだったら今まで何度かあったことだけど、今では私達の関係は全く一転している。

それがとても不思議で、大切に、奇跡のようで、信じられなくて、夢を見ているような私が出た。

「えへへ」

自然と、頬の筋肉が緩む。

「あのさ、本当は誕生日プレゼント、別に用意してあったんだ」

私は、綺麗にラッピングされた小さな箱を渡した。

彼女は、しゅるしゅると紐を解き、箱を開けた。

「コレって……指輪？」

「うん。その、恥ずかしくて渡せなかったんだ」

私とあなたの指輪ですだなんて、言えるわけがなかった。でも今なら言えるから。

「ありがとう。ねえ、目、つむって」

「え、あ、うん」

指が触れているのが分かった。

もしかして、この感触は、という淡い期待が胸を満たす。

「目、開けていいよ」

ゆっくりと閉じていた瞼を開けると、私の左手の薬指に、指輪があった。

「こ、これ……」

「もらったプレゼントをどうするかは私の勝手でしょ？だから、これを私達の婚約指輪にしましょ」

「うっ、うう」

「ああん、もう、また泣く」

感無量とはこのことだった。もう、戻れない。私はこの人のことを、本当に愛しているんだと実感した。

そしてもっと、愛を感じたいと思ったのだ。

「ごろおん」

私はもっと甘えたくて、その健康的な太ももの上に頭を乗せてはにかんだ。

「も、もう、何なのよ」

抗議を述べる顔が、少し赤くなっているのが嬉しかった。

だからなのか、私はとてもいい事を思いついてしまった。きつととてつもなく甘く、淫靡なこと。

「キス、して」

一瞬彼女はびっくりした顔をして、

「いいよ」

と、顔を近づけた。

勿論、唇を合わせるだけで終わるわけもなく、私達はポーっとした頭のまま、互いに舌をねじ込ませていった。

「んっ、くちゅくちゅ」

目の前の可愛らしい目が潤み、とろんとしていた。

「んっ、あっ」

そして左手が伸び、私のスカートを捲り、

「私、こなたが欲しい」

